KUAIWA HEN.

Part III,

JAPANESE TEXT.

Exercises XV—XXV.

洋学文庫
文庫8
C 763
2

京都帝國大學圖書

第十五章

一 新年ハ祝儀を申上まして明まして吉春より座いて二ツ同様小ハ目出度ハ産いまして扨旧年ハ種々ハヤ何卒相変まして是誰この礼食

帝国図書館藏書

41- 3590

積を持て来い ㊂ 是ハ恥辱の座
いまゝでの年玉の市迄 ㊃ 徒町
寧ろ難有の座いまゝサア先〳〵此
処へ何卒慇懃と屠蘇を一献 ㊄ モウ
お構被下まゝれ必何卒 ㊅ サアお

雑煮の醒まゝぞう着をお取りて
て呉下 ㊆ 重くお恥辱でお座ッ
ハ ㊇ 時ろ詰ない事をお詰申
指でもの二日れ晩ろ宝船の絵
図を枕乃下へ入て其ぞんの夢伐

占ひまそこの彼い何言意味でも産
いまそ ⑨ 左指サ何だの空れ事で
まそが昔からの例でそうだ拓
やうまそ ⑩ 私も何を馬鹿らし
く思ひまそ乍然吉夢を見ると

其まし運の良と言まそから一富
士二鷹三茄子とこの言葉を見て
大名までも成るいものでそハア ⑪
イエ其指な笑談を止て十一日まは
ガ承知の通具足開で何卒一献齎

〻度から出を願ふて　十　難あ
其処で初卯も何日でも産いまして
十一　エ、嬉しい日のと思ました　十二　其
から此年は恵方も彼処だから
両方兼ねて同道致ませう其代

十一日は新ヤ三ヲ　十三　其から八
日にも何卒願ます先今日は他処へ
も年始を廻りけるや成ませんから
亦何伺ます　十四　下然只今萬歳の
参ました同拍に童蒙の気も成て

見物致やせ〳〵ちやあ座いやきん この 十七

道外て居て慮外陽気れ物でも

左指れら其もあ見致て参やきゝ

十八 何を面白太夫より才蔵の方の

却て上手だ至極矣せやもて 十九 ア

右の数延〳〵を致やまた年数を遠失

禮でお座いやもてこの急事もこのら 廿

左指でもて其れらば日に是非窺

ませゝ 廿一 必ず待やもて左指れら

第十六章

一 頼ます〻　二 誰何　三 鶴澤松右
衛門で御座いまして此方目通を願
度て出ます〻てそこの方主人も居在
宿で在〻やいまして　四 へイ此処
へ御通なさい下ます〻主人へ申聞ますて

こなら　五 ヤレ〻〻鶴沢氏触ってサアく
何卒直ま奥へ　六 先日ハ実ま御様
やまして〻で何をハヤ其節も別て
御歳玉を難有御座いやました　七 イエ
色く御馳走に預ます〻て私こそ却

て今日は紙屋早く出掛かさいま
した　八　兼ても約束し初卯で御
座いますから御同道で参詣いたし
ますせう　九　何卒御一処に私こそ
樂で居ました御然未迄まの御
座いますせうから唯今詰らん物を
付ました一寸一盃やつて参りませう
十　イエ其も折角乃何でもこの帰
てこのら御地走に成ますせうまだ
春は気色を十分に見物為ます

成たけ早出掛ますぢやあ産い
ませんこの㊀何でもあ随意に致
ますせ私ゝも支度い触あ産いもて
このら直にお供致ますせ㊁アヽ
今日い良天気だのらあ宜敷い

マア参詣の人は多るす㊂方拵さ
歩行ま邪魔で却て餘何だのら
外方の道を来ますせこの㊃何世
間不残参詣しますてから何ま
も込合ますせ㊄ヤア向から万年

爺そ助この条まして定て氣儘して
ゆでゐ座いますせう ㊀ イヤ是ハ何
方もゐ揃で能今日まマア私も
唯今帰でゐ座いますこの何も大
変の人でトント歩ません ㊁

此処らでさへゐ揃よ迄合まるからた
揃でゐ座いますせうマア徐く条ませう
㊂ たた揃ならゐ怨敵さい ㊃ 成程萬
年氏ゐ訓邇剛俊れ人だ土産ま
繭玉を買と思まるこの賣切たと

みえて御座いますきん　廿　アレく彼処
ゟ二三本持て居ます様子ぢこのら見行
て買ますぜ〳〵　廿一　ヲイ此蒟蒻い何
程だ　廿二　一両で御座いますよ　廿三　剛
俵ゟ高直一分ゟ負　廿四　檀那モウ

二朱御下残物でこのら有ません
廿五　途方こそ無い迷惑を訳ないだいるも
程この有併一分二朱ばら買ても
宜二本負れ　廿六　時ゟモウ七時過
だのら徐く歸とします　廿七

成程何処そで一盃飲と思たが
遅成たから内へ帰てやりまし
（共）雞有ざる産いまそこの併に気の毒
でもあいますて（乾）何ぞせ何時
でも私一人でも一盃やらこの

ますてから尊君このあ出だて下度淋
鋪まして却て私こそ其代よハ本
の有合で何まもあ産いまん（壮）
何致まして併其彩らあ馳走まれ
りませこの

第十七章　早

一　喜三郎手あへまぢ話れかつたの急なあ用を仰付て来月五日にも大坂へ出立致さるくてい成ぬいテ二其でい道中れあ支度等を其時迫小

取揃すてハ成ぬいて三勿論れ事さ就てハ手前い是非連て往稼だが宿場継立等も紙気を附て呉るこの宜四畏またあ荷物い何位糸百匁五招サマア予この乗引戸駕籠一

挺本馬一疋輕尻一匹両掛二荷其位は物だ ⑥ それから明荷だけ買て両掛ハ古のを繕ひ直せ ⑦ 其様な事と何でも手前仕ごの宜 ⑧ 先ず品も出来揃ひ

た品から荷俵を拵へ直せ　この軽尻は方は私等の荷物と成る君のお夜具を附ませ　旅店の夜具ハ着れますい　この ⑨ 宜ハマア其で支度をモウ調た出立ハ明朝七時だから先觸い

出たらゝナア　⑩ハイ先刻出やうした
人足や馬れども歩ぬるまで八半
時と申附ませゝ　⑪是人足モウ明
蕎を茹るよ附て仕舞たの然而お
かるゝ就ては其れに揺てい宜れい宜気

を附るがい　⑫是宿役人昨日の先觸
に通人足不残揃て居この工御制度通
賃錢を拂こうら此駄賃帳へ書止て
くれろ　⑬ヘイ畏まゝた為替へ此
通出記ますてと　⑭ナゼ人足沢駕

箒を揚ゲいのぐ然る小荷物を取く
付ケ出すこのヘイ〳〵と申て先刻ゆら
何ちたんだ是此方等ハ日輪ハ有
内止宿へ着ゆいぢや来らん 五 モシ
擅那今日ハ實ニ骨を折まして

そのゆら少く酒代を何卒誠よヤ兼
ま〳〵ここの 六 蠢漢メイ 立場ヤ為
て居癖ヨ厚ケ間ぎ酒代を無物
だ殊ヨ此方等ま御用道中だ馬
庶ア吉れ 七 宿役人モウ人足ハ揃

て居この（十八）へイ市先觸通り人足
ハチヤント先程こゝら其人足荷物
を速（十九）此宿でハ大ゝ手廻この宜て
能（廿）私どもハ當宿役人でハ産
いまてこの方案内ハ罷出ます〳〵てハ

座いまてハ旅宿ハハ本陣この居合て
無據脇本陣まてハ勘辨を何卒併
ハ差支の方ハ指ゝ付置ました（廿一）
其も仕方この方何も兎もあれ案
内をもるこの宜（廿二）この宿この其で

乃座いまして　㊱ヲイ亭ノ主奥座舗ろ
奇羅れ處を檀那れ居間よ
為招よ然して万事疎略この有而
者濟ぬそ気を付て　㊲へイ〳〵
家内ものみを皆能言付てハ

置ま〳〵たけれども行届ません処ハ
乃差図を宜敷何卒お風呂も先刻
このら沸て居ますそりらお上へお窺ひ下
ま〳〵　㊳唯今窺たら直よ召さ
だのら紙不都合れ無招よ然而

餘熱過のハ嬰だこうノオ適宜
加減を頼ぞ　㊐　沙湯ご淋まし
ら直ま沙膳を差上まして宜舗
お座いますこの　㊑　今ま此処から淋
汰を為ら其迫ハ控て居ご室

㊐　是〳〵モウ沙膳を上ても宜から
直ま　㊒　ヘイ沙膳ッで宜舗沙座い
ますこの其以前ま沙酒も如何で
沙座いますと　㊓　何〳〵旦那ハ下戸で
いらつしやるから沙酒ハ些も召上

ゐい併拙者ハ少〳〵用からノオあと
で此処へ許り一銚子をつけて来て
くれ乍然是ハ檀那ヨ内證だか
ら其積で　世　其ト委細呑込で居万
ち　世　是ハ勝手モウ済だから後で

良煮花を上る拙ヨ序ヨ宿役人を招
で貰度　世　ヘイ恰度居ますから是へ
招ませう　世　ヘイ何ぞ用でゐ座いますか　世
ン、餘ほ依でも彩いこの明日旦那ハ挑
燈引ヨ出ヨ立ヨ成こうら其含で萬る

差支れい拵よ殺この宜殊よあ駕籠人
足い紙擅た者を擇で貫度毎度旦
那も乗嫌と仰付て後の宿等でも
困却だのら随分良人足は揃拵よ
宜気を附て（共）へイ〳〵當宿でい処

必者れとい遣ません他の宿こらは
違まして駕籠人足等い殊よ吟味して
渡者をつひてやら其儀いあ心
配ます及ません（共）喜三郎人足ぶ
揃たら直よ出立に成さう（共）只今

よ申上ヤのまで少〻待ち下さるると
おれ両掛の人足い為て居ますてこの肝
心のおれ駕籠の人足こが獨不足でおれば
座いますから（笑）宿役人何〻た物
だ昨夜あれ程談〻て置たよ困却

ぢやおれいこの未人足が揃おいのこの異からん
一躰御用道中を何と心得る（平）恐入
ますてお座いますへイ唯今も急よ
催促致よ参ますたこの何もまや實
に（笑）何だ〻人足こが為たの（豆）へイ

漸々てゞ産いまを何卒お上へ左様御上げます

第十八章

一 喜三郎先達而い道中種々苦労だつた処で余少用ご出来て

京都迄往かくつちや成らないこの何を度く災難で気の毒だが実は他の者ぢや間に合わいこの合度も大儀ぢら又一所に

二

ヘイ何仕まして其者何返でを御

供ハ厭ませんこの為君こそ誠ホに
難儀でいらつしやいまもて弥張だ
用道中でこざ産いまもこの ㊂ 何今
度ハ自然れ用で其ほ急の旅で
もれしく為めら所くれ名所古跡

等を見物しようと思ふ ㊃ 其者
トンダ面白ざ産いませう其処で
荷物の仮ハ ㊄ 何両掛一荷サ只着
替の二三枚を持て往去宜んだ然
して細代れ赤掛よりや柳箱れ

西瓜の方こゞ宜くら其を取て来
てくれ暫子のユ合こゞ悪と
いかんこゞら能気を付てノオ ⑥
ハイ拷桄の西瓜を買て参ま
た直覧下 ⑦ 題を妙くゴ極

暫子は機會を儲通だ大體持
て往ふも揃て置たこゞら詰汁か
成て居ま人豆を一人明日の
弁当拵ま頼で来てくんな ⑧
左指ゆら出立ハ弥明朝で

ご座いますてこの ㊈ シヽマア往る処迫
行て泊と為よう ㊉ 其なら
人足を頼で置て其後よ私お
支度こお座ってこのら買物を後
たりして叅度ご座いまして ㊉

宜く是から勝手よ能分た用
を足して明朝ハ出立の支度
をするこが宜 ㊉ 難有ご座いま
して左様ならば往て叅ますて ㊉
旦那人足こがまりまして

このあ掛をあ出ますまう　十四　ヲイ予

ん拾支度この出来た扱出掛ヨ

ウ　十五　今日ハ天氣この様てあおあ

また至極結構であいます　十六

昨晩の招子ぢや曇て居たの

仕合よ気を拵ヱ彼是

為中モウ那川駅だ相對て人

豆を頼ご宜　十七　ヲイ宿役人お

對拂だの人豆を一人河岸を出

ふくんれ　十八　ヘイ畏まつた壹

貫五百であ座いまス　九　其で宜
しく連人足を出せ　廿　へイ此の
者この荷物を擔まる人足で
ご座いますと　廿一　ん、連揚ろ〳〵
廿二　其三百文食い萬年やに為

よう〳〵　廿三　其この宜敷ご座いませう
廿四　オヤ此入ます〳〵　透て居ますて
やら直と奥の方座敷へお通
ま法成ます　廿五　姉サン旦那ハ畫
食を遊ばすやら何この見繕て出

てくれ品を吟味して然而
酒を少頼　廿六　ハイ畏まった　廿七
ライ妹サン何した未だ工成丈
ま急ぎから　廿八　ハイ出誂こゞでさ
ました　廿九　ヤア是い結構彼

名物孔海苔を出してくれ
酒の肴まで至極宜　卅　喜三郎
遠慮なしに今些飲ナ　卅一　難有
さ産いまもモウ十分頂戴致し
ましてお先へ免を蒙てお

膳を頂戴度ございます　世　サアく

不揃ヨ今些何この取らうこの　世

イヽエモウ澤山でございます　世

ヤア銚子切だこれ積まして予

も一所ヨ喰ヨウ盛てくんな　世

如さん良茶を入て来てれ

くれ序ヨ勘定の出仕を　世　ヘイ

御書付でございます　世　ヽヽ二分

二朱と三匁五分この其ほうら是で

宜ナア是も少許だの茶代だ　世

膳を頂戴度ぢ産いまして（世）サアく
不揃ヨ今些何この取らうこの（世）
イヽエモウ澤山でぢ産いまして（世）
ヤア銚子切だぢ積まして予れ
喰ヨウ盛てくんな（世）

ヲイ妹さん良茶を入て来てれ
くれ序ヨ勘定の出仕を（世）ヘイ
ぢ書付でぢ産いまして（世）ヽヽ二分
二朱と三匁五分この其りら是で
宜ナア是を少許だの茶代だ（世）

雞有汝産いまを亦汝為を汝待
申上ますて　世　題人豆檀那この汝
立よ成ひら苟を揚ろ然石如何
だ賃錢を増この神奈川迄手
苟亦に擔で行ちや　平　ようく

汝産いまを遣ます　世　旦那神
奈川迄ぬ駕籠のお渡い出で
来ませんこの　世　否　安亦ちるれ
ら急ても宜　世　一分二朱　仕下急
で翌ますひら　世　蠢漢始て駕籠

よ無やしめいい〜無件ることを言
れ旦那も遊足を遊者だらら
遊歩行れきる遊積だ　其様
事不計仰と何卒　うるさいモウ
いけないと訳たら　其様ら何

位れら檀那冥利あり産いますて工、
旦那　左様さ一分位なら無
減法界も其アやア餘だ旦那
其様よ易行るんぢや有ません
行れけりや恰い〜此方を止

エヽ思斷て神奈川迫遣ませう今日ハ仕事このドウセ溢だ　五二　酒代も無だが宜この　五三　宜敷あ産いまちがのアノオ土場無に骨折まゝたなら一盃買て祐下　五四　其又

や骨折次第ヨ併餘計ハ決して出せないぞ少許のるい心付を　五五　雑ゝよう　五六　喜三郎手ぬ無れさいまゝ　五七　芽も癒たらう賀能を取が宜

㊄ ヘイ恰二挺御座いますてこうら
戴て参て参ます㊅ヨイ駕
籠や神奈川の旅店ハ何方の
一番良㊆左様で御座いますて
下田屋と新田屋この一番宜敷

御座いますて㊇左様か何方でも
宜敷よ為よう駕籠を其処へ
着てくんな㊈擅那様方御泊
で御座いますら私方へ御
泊下さ新田屋で御座い

ますとほど疎末申上ますせん（笑）
手あ宿引この已等ア何時下田
屋へ泊んだこうらいけれい（笑）で
もほど産いますせうお今晩も旦
下方へ仰付下ますと揚る

何卒迷るほた簾求にも仕ますん
から何卒ヲイ駕籠屋さん何卒
檀那へほ勸めて泊下れ（笑）主家共
もいのれい徒だ旦那方ハ下田屋
お郵定宿だこうら

第十九章

㊀ 檀那様お着だぞ　是く下女お濯ぎ
れ湯を持て来　㊁ ヲイ若衆旦
那れ草鞋掛と我れと一所
ゑ仕舞て置てくんれ　然而両

掛を座敷へ直に　㊂ ヘイく唯今
運送まして旦那お悪座敷も
お二階こゞ塞て居ますから下れ
方の上段れ召に成ます　㊃
其内ら冥ら一寸とした物で

一口出るは呉㊄そなたハ風で何
も出来ませんでお悪でお座
いました㊅有合れ物で宜然而お
膳も過まして貴度㊆銚子
ハモウ止てお膳を拵て参ました

今夜ハ一向お構ひ上ませんで
甚㊇大まお世話に成ます序ま
お茶を出てお呉㊈へイ〳〵只今
差上ます㊉ア〳〵奇麗れ家だ
ぬて随分行届ぬだ㊋たぬで

ゆ〜産いまして料理なゝもトンダ氣
この利て吁嚀でゆ〜産いまして　十三　ゆ
黄花ゆ〜出来ます〜た　十四　ヲイ其処
へ置て脂を撤て呉れ　十五　若旦
那様〜宜茶でゆ〜産いまして実る

芝居ハ赤海道ヨ限ります　十六　按摩
も宜ゆ〜産いまして　十六　檀那按摩
ゆ〜参ます〜た　十七　左様この今日ハ餘
程歩行たせいの草臥た何卒一
揉で呉れ　十八　アヽ〜心持だつた

喜三郎其事如何だ　㊇　イエ私い止まりませう　㊈　左様の其ぢや拙
麼よ錢を出てくんれ　㊉　ヲイ拙
摩何程だ　㊊　二百文沽下　㊋　其ァや
高粱少許擦でめぐ何だ百五十

よ頁ろ　㊌　惟く喜三郎其拙事
不言と遣ご宜　㊍　說教读でぼ
座いまして　㊎　ヘイ私い酒宿役人で
ぼ座いまそこの檀那様方も昇で
ぼ座いまそこの酒で座いまして

世 昇だの何だ 共 宿帳へ住所名
を録まして 先 何の某殿の家
来一人だ 世 宜安だ産いまして 先
てハ筆墨代をあ一人ま四文宛で
戴まして 世 時よ 森三郎明朝ま

ひら今晩モウ寐ヨウ 世 宜安だ
産いませう ヲイ 妹さん床を取
てくれ 世 ヘイ 何方れ方をあ
枕よ敷ませう 世 南枕この良是大
分枕紙この汚て居このら取替

て残る今迄蒲團を貸て呉今
夜ハ餘程寒そうだ 芸 行燈の油
この樂成た 芸 唯今強まして 芸 ハ
朝早こうら其積で頼ゼ 芸 ヘイ
御機嫌能休ませまし 芸 旦

那唯今六時を撞ました 芸 目覺
遊ました 平 アヽ ねむい 擅那 起
ます〳〵 モウ 六時で あ座いました 芸
オヤ 充採この 遠許寐忘た 芸 ハ
多代湯を取ました 芸 ヲヽ 旅

籠も何程だ　四四　ほ一人前一分二
朱でほ産いますて　四五　ヲイ亭主是
ぢや何勘定　この違だらゝ茲こが
上旅籠この　四六　へイ一體ゑ諸色ぶ
高直故以前より旅籠も

程上て居ますと　四七　雖然惟ハ百遠
だらゝ併夫ゝも　四八　拙の家許
如斯諸色こがの高直ぶの何処の
宿でも此様ハ事ハ　四九　オヤ大
ゑ茲ハトンダ過失致ました恐

入りてあく座いまして全書違で
何も是れ何共申譯このあ座いま
ちん　㊀　夫れ見ろ併間違ひら夫デて
速書直て来い　㊁　ヘイ只今ハ大
ヨハヤ出て来ました　㊂　夫ら

勘定渡で草鞋掛を出してくん
れ直ヨ走こうら　㊃　左様ひらあで
撥嫌能　㊄　今日ハあ昼休ハ何処
ヨ致ますう　㊅　藤澤このあらう
㊆　茂沢ハ中納言様のお休ヨ

成まして四ら混雜〳〵ていけまして
まい 五 其樣四ら先の亂の
翁よ為まし 五 大造れ人數
だ上下幾人だら〳〵 五八 マア彼是
二百人位でゐ座四ませ〳〵 五九 何

方ち藩士だの供斬を為て斬れ
たとこの論ぢ實この 六〇 第尚でゐ坐
いまして酒よ醉て居たさ〳〵でして
夫よ何この酒乱の揺子と見ま
〳〵て 六一 左樣この併可愛さ〳〵な

るすをした然而あ揶の人豆ハ如何した犬造後たさうだ㊀後に見えまして呼々人豆何を為て居㊁唯今艸鞋を買て居ました㊂人足彼処で混雑する

のハ何だ㊃彼ハ人豆こが花のを附替為のであ座いまして㊄道中も夫この面倒つて困却ナア

第廿章

㊀従是漢字を学ぶ成る附

で昨日字典を求めて持て
参り　たゝの是でげす　二　だつて
未引様も氷解ませんのゝ　三　仏の
引のハ造作を有まきん夫を先
教て上ませゝ此字引の総目と

云物を先御覧成此通れ物でも
總て字と云物ハ源是を組合て拵
た物でも其故能順を覽てさへ
居ハ何拵字でも直ゝ引まを道
理でも　四　二様ゝ書て有拵ゝ見

えますとこの此譯い ㊄ 片方四角な
樣ま見るのハ角文字と申まして
亦眞或ハ階書とも云まして後の
ハ草或ハ艸書共申て此書樣ハ
段々ま崩て色々ま違いまして亦

行書と言物ハ眞と草との間の
物でして ㊅ 成程然而見れハ何両方
孤て知れくちや成まして ㊆
尤採さ先眞ハ原でま違いまてぶ
不斷ま草を重ま用ひまして

ゆゑ総て皆あ学ばれいぢや能
ません　八　夫ぢや引様を何章　九
左様なら今教て獻ませう借此
総目ハ凡二百十四文字ある産いまして
其内ゆ何偏或ハ何冠まるい何

構等と云物この有て総ての字ハ
夫々何も偏と言物この冠と云物の
ゆ属して居まそこの夫ゆ属して
居想の偏等を持て引んでそ譬
バ此字ハ脇ゆ人偏と云物この冠産

いませう宜しく産いまそこの字を
引うて思時ハ此イの部ニ属し
て居文字ハ内を攪バ急度有ま
せ皆此理屈でそのうら何の字で
も其部を引て尋れバ必氷解

まなかなか解悪い時ハ康熙
字典と訓支那の字引ハ始ニ然
訓類の字を聚たのをお覧なば
お宜筆畫を算て引て見れバ
何偏或ハ何の冠ニ属して居と云

るこの委細書て遣ひますから ㊦
艸書も矢張然云風ゝ引んでは
遣いますこの ㊤ 先草書でも大体
偏冠の類ハ自然知るものでも
こゝら其処を以て引けバ氷解ま

せゝこの中にハ知れ難る字も多有
ますから然言時ゝハ別ゝ引様この
ゝ故文字ハ明人ゝ聞より仕方この
ゝ遣いますせん ㊤ 何も大變ゝ六ケ
ゝ学問だ是者何 ㊦ 何別ゝ煩

懊事ハあり難いまゝん勉強次第で
また㊟字引を見るよ脇よ假名
こゞ付て居又下よも記て有まゝの
ハ㊤脇よ書たのハ音と言まゝて是
ハ大体二有まゝて漢音と呉音と

言まゝてこゞ夫ハ漢の國呉の國と申
まゝて支那の両国の読揉でゝて㊦今
でゝも支那でハ矢張如此讀まゝてこの
㊧イ、エ是ハ極古の読揉でゝて唯今
ハ讀声ハ唐韻と云まゝて㊨然る下

よ書たのハ㊉夫ハ訓と訳まて是
も日本語で其字の意味を譯
したんでて同じ字で意味が
幾箇も有ますから訓を色々
あ産いますて㊉此字の角よ圓を

附たのハ何云訳でてこの㊉夫ハ平
仄を印た物でて平仄よ因て意
味の違ふ字このあ産いまてこの一
躰平仄と云物ハ不斷不用物で
て唯詩を作時のみ用まて㊉

此字と𠂤字とを引て見たが有
ません 廿四 是ハ俗字其ハ古字 廿五
𠂤字れ音ハ何讀ますて 廿六 夫ハ此
方で出来た字で音を平仄も
ありません 廿七 𠂤字ハ幾等引ても

あ座いませんお 廿八 夫ハ如此云字
の略でして 廿九 畧とハ 卅 餘畫の數
この多て煩雜ら少しして書た物
でして 卅一 躰支那の文字れ權
輿ハ其始ハ何ら成立た物でお

疑いまして、たくの世支那の蒼頡と
言人この鳥の脚跡を見て始て
文字を拵たとハ云ましてこの何を
信られませんハ夫ハ能て如此云
噂この有ましテ彼れ蒼頡と云

人の字を拵たら鬼等この文字と
云調法れ物この世の中に出来たら
此から鬼れ爲所業を人間ハ知れ
て種々の事を書るだらうと言て
哭ましたとこの云ましこ天でい文字と

言物の出来たら人間もだん〳〵慧
舗利口に許萬事聞過て肝心の
質朴と云所こゞ失て仕舞よい
困却だらうと言て栗を喰〳〵
たと云話この有まこの支那で

兎角如此云空な事を好云まこと
數の多物を拵一人の所業で何
して左様出来まこと物この最初品
物に形を執て聊覚に印よ書
附た物この段々よ後から出来て

来た物だらうと思ふて（世）何様成程併悉像を書た物許でも所詮いまだまい聢と無形物或ハ所為ル類も如何（世）夫も大方何この其状ハ原或ハ其理ハ因て

書ます〻〻譬バひゞ〻と訳東の字ハ木の蔭より日の昇る状を表し あきらかと云明ル字ハ日月の二を合て造ると云聞の字ハ門構ハ耳と云字を書又ハくと

云書の字ハ筆の下より曰を書
た様なる類で其原ハ皆世是迄
ハ平假名を習て居ましたが
師匠の申ハ夫を止て学
書を学だが宜らうと申ましたが

如何でありませう　世五　何言流儀
を学ばるべき　世六　積　何云流儀ふ
併そもの書方を示色々有ますて
のの　世七　あ存ぜが有ますんなでそ
世八　否　全一物と心得て居ました

㊀ 唐様と俗様と二ツ座つて
唐様ハ清朝の書様を真似た
物で俗様ハ赤幾色も有ま
すの其内ハ清家流と云のを
一番能と為て政府で用る

書法で全日本人の発明為た流
派だそうでして ㊁ 何を西國の学問
ハ大変ハ入組だ物で何も腰の曲
まで學でも所詮覚盡せまして
い ㊂ イエマサカ其様れ煩慎物で

もあでありませんこの本氣ヨ成て秋方
古さへ為れば何でも無事でゐて

第廿一章

一 今日あん引合申度事ハ外でも
あでありませんこの先日の書翰

で粗々やうへ入ました通ここと申我
國の商人の貴重れ商人と取引
約条違の事よ仰ての訴訟一件で
あでありまして 二 ヨヽ家程夫ハ慥湊
屋濱右衛門と貴國のこれ事

て渡度いものたるを㊂尤拙で
御座いまして書翰を添て蓋を
置た物象を写を御覧ニ成れ
バ委細分明まそゞ羽毛一端ニ
付而洋銀十八枚替の約条を

即貴國の商人洋銀ハ高一万八千枚
を以て我國の商人ハ羽毛を買事
を取究して備其処で荷物引渡
ハ我ハ〻〻と商船ゝの名次第十
日目と廿日目ハ勘定引取物

果に固談判を遂たる事そこで
あ座いますとテ彼処真節羽毛のね
場この至て好物猶其上まも上想れ
景気で有た事故当人も随分
備見込で買込〳〵処却而直この下げ

落してもらやとそ日ま至てハ十六枚
こうこと買手この無位れ相場ま成たる
故殆当人も困却極て頻ま勘辨の
ゆを頼へたる処固より弱象遠のる
故荷主も承知致ハい事六ケ

安おり成済る我方に役所へ訴訟
て出すべきた場でありませ成
程遂一承知致ました併只今仰に
趣と茂人のかしたとハ些違ます
る覚ますて済巻まお願ました約

条に横文に基程承ました通商船
の都ての上まて書て有趣る見えま
せけれども茂人の申まは些も違
に訳でハ無金六十日の日数限と約
束致ました處時過て漸七十六日目

よ至て舟こゞへ港致ましたそうで
して全躰期限通よ渡さへ為れば
よしや損よ成るも辞應れく引取
積で有たと勿論人かられ中述でゞ
産いまして

五　併當人ハ危拂やたで

そもまませうけまども夫ハ何を些
信じられません事でも其訳を自
分ゞ印を押て有務為出こゞ正敷
作有其拂れあ説でハ一向首尾と
成ません夫ゞ餘異からん事この

思ひまゝに横文字とハ申物の一二三の数字丈位れ事ハ南地の高人ハ皆覚て居れいるが仮ぞ有ませうや六十日と書て有この無このを其場で直答想れ物ぢやありませ

んこの六級程大ぶ仁然貴國の商人い此國でも総て正直れ者だと絆皆気を後て居故其拵事る気こが付れかつたのを知ませんノサ仰の様る唯一通の理屈斗でも

是非を糾譯にも行ませまい ㊐
尤相仰て見と何この我國の商人
許の非道ぞらい拵でもこの正直と
不正邪を明白に論ずる日まで
日本に高人も餘評判この搭別宜

敗方でも有ますまい夫ハ甚其意
を得れい事でも約条書この證処
だから口上でハ何れるを言つて
も取まハ呈りません併貴國でハ
書た物ゝりハ口で言た方を却て

證処より採録致しましたのの八イエ
迷て何いまして唯今も申た通其
処まい理屈外の意味あひも有まい
うんでもないから追て猶衆議の
上九何云處置振より致しこの其方

迷断の処を速より何卒十何を
處置の附やうこの煩懊と存ます
菊人から又苦情を言立て向へ
差入た五百枚の打金を何でも
返て貰たいと云て居ます十一

夫ハ何も無理な埒もない話だ
其様な事ハ固より貴國でも
あ聞入ない筈も有ますまい
勿論聽滅沢よい泰ません甚処
で何〳〵でも論ぜず干ませんから

内金を其儘うつちやつて置て
破断〳〵ならば宜らうと南人を
談付ますてハ如何
イヽエさう
言採れ處置振でハ此方でハ
承知ぢの出来ません内金を

損ずして仕舞沢れらば最初
約条〳〵たる先達ての直段よ
今日の相場を差引て償金を
了拂れくつちや成らん道理で
も併此方でい其揉れ事ハ固

より願ません尤時餘羽毛も
買手こゞに付是非とも引
取て貰れくつちや成ません
夫ハ何を六ケ敷やらうと思ま
も餘残忍るすでも左様なる

日ノハ蛮人ノ臭上ニ潰レテ仕
畜マセヽカラ㊄潰テモ宜沢ヂヤ
ま産いませんこの固より引負ニ
拂きれい附き濆るのを勿論の
事でせヽ則万國の商法と云

物でもマア私等ハ考ヂヤ彼類
の山師商を為族ハ皆潰て宜道
理ノと思ますと㊅ハヽア皆渋ら
大変のるでせヽ尤拂きる附
ノハ蛮地の交易ニ直ヨ芸敬て

仕舞や為ませんこのシラ併何し
ろ些捌この面倒でもからモウ一
度為人のら貴君の方ハ商人
へ示談致さして見たら何でも
夫で迚も勘辨この出来れけまバ

其時さ仕のまま片ハ附採も
有ませんから（十七）畢竟示談この
調ハ形い故まらを無據此の事件ハ
推轉訳でもから此上ハ徒れ事で
もよしや致て共詮承知為んの

サテ勿論されると思ますと兎ヨ角何只
公平れば処置を願より外ハ有ま
せん必今日より三日の内ヨ是非
こゝハ決断ゞ出れけれバ何此方で
又取扱ハ出ざいますと　㊅今一
度何取紛の上夫迄ハ必

第廿二章

㊀春ト心持ゞ何と成宜敷いま
すと　㊁自然と氣ゞ引たて陽気ヨ
成ますと　㊂追々暖ヨ成ますと　㊃今

日等ハ袷を着ても至位でして ㊄
併未餘寒この嚴敬ちゝ座いまして
㊅ 今朝程等ハ寒中の掛では
産つまった ㊆ 就晩ハ来意ある座
いまもこの晝間ハ餘程凌能成

まってもも ㊇ こゝと申しても春ハ
裏迄何しても違まして ㊈ アヽ長
閑れ日だ ㊉ 實ゝ能時候ゝ成
まった ㊋ コレ其処の章子を明
れいう大分蒸〻為て来た ㊌ オ

ヤ外ハ日この當て居まして強い風
この南ヨ寒たと見えまして 十四
大分暖ヨ成ました 十五 漸時
候相應ヨ 十六 未何も朝晩ハ冷
つさまして ナア 十七 時候が未兎

角定ませんでした 十八 寒気を猛ま
した 十九 併モウ時候この所候で涼
敷いまして 二十 大ヨ暑成ました
二十一 今年の夏ハ凌悪そうでご座
いまして 二十二 何も如此暑つちや実ヨ

堪兼ますて　㊀　加之ま此二三日ハ風
の些も強く産いません　㊁　如何でて
成ル暑さハ随分あれ弱でも産いま
せう　㊂　如何ますも堪られません
㊃　非道暑さで困却まして　㊄　少々

夕立でも来バ宜ま産いまてこの邪
道照込ちゃあ産いませんこの地面
この大分干割ました処があり
ますて　㊅　暑さに負ましたこの
て気分ご勝ましきんで何もハヤ

武　夫ハマア誠ニ大事ヨ大分暑サ
中ノ流行ダデス　見　暑ヨ入リ
テ格別凌ギ難ウ。誠ニ座イマシテ一寸
ホ揚子ヲ窺ヨ　世　至極何モ暑イ
ルデス併尊君ハ何時モ御健

デ能ウ御尋ヒ下サ[illegible]タ誠ニ途
中ヲ嘸ヒ暑ヒ産イマシタラマア
誠ニ肌デモ脱ギ捨テ　世　大分暑
モ凌ギ難ウ成テ来マシタ　世　暑ヒ
ヲ風ノモウ秋ダカラ土用中

の揺れ事ハ御座いません㉓ア、涼い風が吹きまして㉔暑さも大きに楽に成た揺で御座いまして㉕風の音が何とれくモウ秋のよふに成ました㉖昨日迄ハ風も

れく誠に暑御座いましてしたが㉗厳しい残暑で御座いまして㉘残暑ハ却て凌悪い物で御座いまして㉙俄に涼しく成ました㉚夜分なぞハ些と涼し過る様でしてナア㉛一昨

日側迫ハ彼揺ま暑ふ産いました
のま今日ハ亦餘冷気まして事伺
して俄まかはりでこの豆如何ま
も惡い季候でふ産いまして豆切
と涼ふなりました豆忽寒成想

でまして豆今朝程ハ餘程ふ産ふ産い
まして豆餘ま豆この爪痛成ました
豆非道寒くまして豆モウ日々に
ふまさま推轉まして豆次弟ま宮さ
この募まして豆是から段々ふ成ま

で行きませんモウ　五　増々寒くなる
でせ　五　併程ひどく寒こゝの入ますこ
ら如此でございますこ　五　今朝
の寒さは何でございますた　五
イヤモウ起て手を洗事も出来

ませんでした手水鉢に氷が全で
氷着て仕舞て石で擲ても何こ
ても為ませんでございます
た　五　寒いので火に側ア離てハ実ま
居れません　五　年を取てハモウ若

い者と違つて猶更左様でも 吾

指この憔悴で筆この持ません 天

尊君ハ餘勉強過る些火鉢でも

手と雖も烘成 兎 能貴君ハ御手ご

爪痛ご産いますせん子工 卒 イ工 郎

分の手だこの何だの覺の無拙でも

其でも中々掌ま向つちや居ら

れませんで覺の通り急の用でも

ら 六 寒ま入まして別して歳

暮事でご産いまして併仍方も

お客さまのお障も社入ません㊷

雖有御座いまを陋宅でも皆様

お変成たるも社在ませんそう

で誠ゝ偖苟冬れ寒さは實ゝ近

頻に覚ません㊸方様から随分

寒さをお厭成まして㊹私方か

らハ未だ神のあんばも上ません

で甚淋ません宅へ宜敷㊺日ご

餘程迫て参た㊻其代夜ハ寐

飽程長成ました㊼モハヤ日ハ長

い頂上でありませう　六　實に朝の事を忘る程に長うありませ
を今日も登寐を二寐入許致
したこの未明の首想も為ま
せん　六　誠に肝迫仕てありま

いまして　七　海ハヤあ事多ういら
つしやいませ　七　年れ暮で嘸
ご繁用でありませう　七　非道
押詰ました定てあれ急ぎ　七　世
話ぎけでありました歳暮にも恭上ま

せんで甚相濟ません　㊀イエモウ
察〳〵申まして態々ハ決して
新年まして　㊁何ぢ年越でハ
疎いませ〳〵　㊂尤採さ節分ハ慥
廿八日傍だと思ま〳〵たこの開

れで御忘ますたコレ誰この暦を
持て来い

第廿三章

㊀今日ハ能快晴致ました　㊁
尤搖でげて誠ま階搖れ函天氣で

㊂ 兎角変易い天気で何も㊃今日も天気ハ六ケ敷様でとても㊄此天氣ハ持直ますせうこの如何でせう㊅尤様子請合ますせん子工㊆空こゞの大分明く成て参ました㊇多分天気ハ上ますせう㊈能天氣で御座いますて㊉珍敷よく晴ました㊋今日も快晴で御座いまして㊌能天気お続ますて㊍誠よ変易天気でハヤ㊎今朝の様子

でいトンダ能天気でございます

たが　五　今日ハ些風吹きました　六

併風故この天気ハ変りまして大ハ

七　悪風でございます　八　大ハ陸

濕がセイこの非道埃で外ハ歩

行ません　九　風も何風でございま

せう　十　冨士南ハ揺でございます　十一

異ましん寒い風でございます　十二　風

のセイこの餘程冷ます　十三　風がい

きます　十四　西風ハ成たやう

でゐ産いますと　(五五)オヤ貴君ハ何方へ出非道風よ　(五六)イヤ強風で何も一寸日に延ばの方まで餘程れい事で尊君も何処迄是から私ハ追風で方角でも有ませ

んこの貴君ハ相悪向風で大変でゐる居ますとナア　(五七)イエ何を仕方こゐ産いません　(五八)マア風の冷寒い事　(世)私ハ風を引た想で幾等ゝ者ゝてもゾクゝ波ますと　(世)烈敷風でゐ産

いまして　世　左様嵐ハ強て来そう
でもあこの空交て参りました　世　雨
ハ降ませこの如何ほど産いませう
世　左様でも子エ大分雲この出
て参りました併降ても強事ハ

有まいこと思ました　世　扨此頃ハ
何この何も日々困却ました天
気でハヤ　世　梅雨中とハ申ながら
能降事で御産いまして　世　何と何
時マア晴ることで御産いませう

(廿)　左様でして何時止るヤラ山月初めから雲切この空も見えません

(廿一)　能如此マア面止りしよ連陰續た物でして殆天の底で雨を脱たこのと思ふ様よ一向晴ぬこの有ません

(廿二)　ハヽア大よ何様な様思バ能如此雨水を天上へ貯た物だと思様よ盡りいるでして何程降ても

(廿三)　昨日日記を繰て見ますたら先月れ二日ら降初ます

たんでも　豐　へゝエ　左様でもその丈
ぢや　成程　頓てモウ五十日ばかり
隆まもナア　豐　左様でも　昨日で
丁度四十八日ゝ成まも　豐　ハゝア　夫
でも　今日ハ四十九日で　明日ハ忌

明ゝ附月代を剃　沢だねハゝア　途方
もない　豐　違ない　是ヤ　宜　併　縁起でも
ない　豐　実ゝ雨垂の音　許毎日聞飽
ました　夫ゝ一寸　其処へ出るにも
道ゝ滑てモウ　誠ゝ出　這入ゝ方

ツクウで　哭　ヤアモウ道ごの悪て
然而加之よ彼処れ通れ道ハ又
出水で堀ごの開いたと見えてモウ
皆往来の人ハ川越の搭でハヤ
哭　あ宅ハ近普請ごの新う産い

まてから如此隙てもハ心配ハ産
いませんごの宅等ハ古家れせ
いのうて彼処是処ごの漏て不叶
昨晩等ハ丁度時て居上ごの漏
初まてイヤモウ夜中ゑ蚊帳を

釣替るヤラ畳を揚るヤラ殆騒
で御座いますた　㊍　ハーア夫ヤ何
もトンダイヤ如此降この長と兎
角左拵でそヨ私宅い未家根の
左程古くいれいのでご座いますてご

自然と面この廻ると見えまして次の
石は鴨居柱等この濡て居ますて　㊎　如
此降この續まてと何ら彼迫一
躰ゴ濕ぬい拵で誠ゴ気味ご悪
くつて何も　㊐　今朝程些調物ご

有まして庫の隅ヨ仕舞込で置ましたお方を出して見ますたら皆表紙この皺だらけでおざいますたいおざいます㊂時ヨ梅雨いの明るでおざいますせ㊂

左様でよてモウ程い有ますてまい入梅あけい糧五六日の内だと思ますた

第廿四章

㊀能ほ濕でおざいますて㊁誠ヨ

結構れ夕立で是で大ま扶ま
ぢ　㊁　是誰この雨戸を少楯れい
の斜面で縁側も何も太変だ
㊂　オヤ障子迄この此様ま濡た
ま是ヤマア併能夕立であ産

いまでヤア電れ非道ま　㊄　祈雨れ
験この利たと見えて思掛れい十分
れ夕立でげて　㊅　不思議れん
でまて神ハ暴未ま出来ません此
面ちや百姓も息を衝ます　㊆

大分ゴロツキまして ⑧ 成程大炮の音こそと思つて居ましたら雷で降ざいますナア ⑨ 雷が鼓まして併是で涼しくなりました ⑩ 扇でげて氷道蘇と思ましたらトウ〳〵遣て参りました ⑪ 挂ませうこのナア些夕立が有れば宜ざいます ⑫ 大分雲を揚て参りました ⑬ ヤア西の方が空が真暗れ事 ⑭ 彼方が方ハ頻る今降て居と

見えまして　㊱　オヤ電　㊲　彼方は
空は恐怖事彼黑雲を御覽
成　㊳　雷鳴この紋　㊴　是で梅
雨も明ました誠に長雨でした
いま〳〵た　㊵　唯今は雷は何で〳〵

た　㊶　實に魂消ました〳〵何でも
直近所へ御降りましたから遠御
座いません　㊷　尊君は雷は至て御
嫌れ方で居ますこの　㊸　世の
諺に地震雷田禄親父と云ますの

私ハ雷様ガ一番怖畏ガ産ウ事

豊　サア皆此蚊帳ノ中ヘ這入テ居ガ宜線香ヲ點タガ是雷除ノ御守ヲ何ッタ其様ヨ周章カラ却テ知レネイノダ

豊　誰カ燈明ヲ點テ何カ急ヨ空ガ暗ク

ナッテ居ル守ガ猶見エネイヤア桑原桑原

豊　手前乾物ハ何ッタ取込ダカ

豊　オヤ雷様ガ怖畏レデ夢中ヨナッテトンダ事ガ成ッタ

是小增内ハ旦那ノ所ヨリ
途中ノモ知れぬから傘ヲ持て
其処迄迎ヨ往て来て呉れ
夫ヨリ雷打ノ鳴て参ったから
降ノ強くて来想でアッタいま

ヨウ油ヨ被ませうこの
今朝ハ恐ク霜でも格の上も家
根の庇も真白
モウ非道ク成程霜程ノ
解て山の方迄ハ道ノ悪く成て

行ません　世　今朝氷こが張ました

世　オヤ左様でこの寒い筈でおざいますね　世　今朝ハ河こが一面ま

氷ましてな　世　左様でおざいます

せう　昨夜ハ家内の水桶ハ水迫氷

ましたこうら　世　川でも壕でも一躰

ヨモウ氷こが張詰ました　世　今日

ハ小供こが池の上ま乗て遊で

居ます　世　非道氷こが張ました

世　飜た水でも湯でも側から直ま

氷附まして何と非道寒じ様でい
有ません　この㊐何処の家でも氷柱
の垂下れい軒端ハ決して産いません㊐
氷柱この垂下処を見ちや餘程寒氣
が烈敷と見えまして㊐モウ程れく

雪が降ません㊐今朝程富士を見
ましたら真白で産いました㊐ヤア
月ハ影こと思つたら雪が降て居
ますと㊐オヤ左様でこの昨晩彼
様な空が晴て星が降様で有

たゞマア思ふも寒ゐい　四五　何と能
降雪でゐる産いまして今日ハ餘程
積ますな　四六　雪も降時も方拵
でもゐる産いますせんこの後この又道の
悪く成て困却ますもナア　四七　東京

ゝ為てハ随分ハヤ大雪でした　四八　今
年ハ雪ハ珍ゐ二尺許も積ました
様でして　四九　マアゝ東京でハ近年ゝ
雪でもこの私等ハ此國等でハ滅
ハ雪ハ何とも思ません一尺餘ら

降てのこの有まゝに家でも何でも皆
埋て仕舞まゝに外の往来の位で
居家の家根より上へ成まゝ
ら何処の家も内へ這入ハ殆穴
の中へでも何なる樣でゝ　幸　貴君

ハ越後へ高田邊で出掛ました
つけ子エ夫ぢやが尤越後の高田羽
前へ尾花沢と云ちや雪の降高
名所でゝから成程　丈　寒答でゝ産
いまゝに霙この降て来ました　丈　道理

で寒さの別であります　昨夜
は彼霰の音で眼の覚まして
寒いので夜明を深く不睡な仕廻
ました　夫より貴君の御宅は失
禮ながら慥柿葺れ御拵子でと

から別して音が烈敷あります
と子工實より雨の激音を聞て眠て
居れは寒んの宜物でこの霰等は
ゾット為れい物ぞ座います　今朝
曙より霧を分て彼野原を遣て来ま

〜たら羽織ハ濕ぬ袴ハ裾ハ草の露でグツチヨラ濡て完了ました（五）

成程貴の中ハ苦行せん私も昨晩夜更て歩まして着物を夜露で全で濡〜ました其

セイこの〜て今日ハ心持こゞ悪うて座いまして

第廿五章

（一）初まして御意得まして事知博と申まして幾久敷懇意を願まして（二）

古道真言でおざいまして兼て御
高名ハ承居ます〳〵たこの不才今日ハ
偏ニ御厚情を㊂未懸違まして
深々御言を得ませんでおざいま
した先始まして毎度悴こゞおせ

話ま預まして一寸あれ礼ばかり㊃御心
安う御子息まハ朝暮失礼許申まして
誠御出ばかりたマア御寛と㊄初
てハヤ御目まに掛まして何このあんあ㊅
私ハ不調法者でおざいまして何分

七 私ハ言語同断太デ御座いまして
初メ～て拝顔を八 是ハ能こそ
御尋来で御座います～た私ハ八月
朔日 稔と申まして以来御懇意を
何分九 扨段々此度ハ御周旋被

を雑有仕合に御座いまして十 イエ行
届ませんで誠ニ併恐悦ニ御座ます
～た十一 若貴君ハ落合久さんぢや御
座いませんこの十二 オヤ是ヤ不思議れ
慌早見さんで～たつけナア能処で

あ目ヨ懸まし た實ヨあ久ぶりで
何してマア貴君ハ（十三）何も似く様
れあ方だと思て夫故ヤレく能処
で扨打強まして久く逢ぬ婦ま
せん毎あ隆で先年ハ色々あで厚

息ヨ頂まして（十四）イエ私こそ何もあ
禮ハ申盡ませんあ其後便モ申べき
ち処更ヨ打怠慢文通も致ませんで甚
ト訳もあ産いまもん備當ハ何方ヨ
（十五）オヤ誰君あと思たら能マアあ珍

安　㊅　鳥渡門前を通まさやから　㊆
何だ堅苦安我等れ内へ来ら
遠慮通行ナ其様ま改て他人ケ名
安　㊇　夫でも近安中まも禮儀育
と云ますから夫ま慇懃した

セイの〜て敷居この高様で　㊈　オヤ
能こそ山処へ誘る見苦安間で裏伺
そ　㊉　左様ら慇懃を蒙まして　㊊
扨是ハ餘失礼ら物でご産いまさそこの
在所から到来致ました　㊋　是

も何よりの物を難有ぢ産いまして併
恐入まして　豊　是ハ餘条未だ品でぢ
産いまして　苗　何より結構れ物を
併ぢ気の毒揃れ　莨　ぢ免ぢ下誠
よぢ苦沙法ぢまして　英　ヲヽぢ久

〜ぬりで能こそサアヽ是へ私ハ
如何ぢたのと案じて居ました鮑
の道を切さ拵よ些も迄入れいら
　　偖僕も近日大坂辺迄發足致
まして就ては留守中家内等

を何分何か（共）ソレハ〳〵何方用
で以度ハ〳〵て又出立ハ何日頃ま
（光）左様でげて多分来月二三日
ま頃ニ成ます〳〵（三）何時頃迄
ま成ますと（世）用の辯〳〵次弟直

立場積で迄産いますてこの併其模様
ま因てハ来春ま成ますこのも知れ
ん（世）迄道中ハ大事に随分ハ機
嫌能（世）雑有ハ産いますて左様ハ
ら何分君ますも折角ハ厭ハ成ま

〜て　世　只今着被〜たおもたの
砌ハ段々難有夫ゝ為る中ハ何角
色々　英　況道中恙なくて誠二況目
出度況産いまして無況労で況産い
ます〜たら〜　英　今日ハ些取急まして

やら況暇を申まして何又其中ゝ　英
折角況出の処何の況愛相も況
産いませんで甚何を　英　拙宅へ
を些況越ゝ何伺候まして今
日ハ況忽々　平　一寸出まして色々

御馳走を毎度上度よ誠ニ出
産致まして㊀マア宜敷ぢや
御産いませんこのモツト何このイヤ
古換で御産いますとこの甚今日ハ
御忽々で御産いまして是ハ御

懲不成よ又何卒御近い内よ㊁
是誰この御方よ成ヨ御履を㊂イエ
モウ御構れく度々出ますのよ㊃
又其内よ㊄左様なら今日ハ御揃
ヤますせんでしたヤア相悪示降

この強く絡て来ました紙捻支
度を貴君の御籠ハ餘程良品
でお座いますと是ぢや何ぢ挽れ
ぬでも雨ハ徹まらない（哭）失敬で
げゝこの其笠を何卒（罕）尤挽れ

ら（哭）日外御出ぎ遊ばしました節ハ甚
御怒々で申訳も御座いません（哭）
イヤ其節ハ色々何と彼挽れま
御攝遊下ちや孟浪ま参上れま
せん今日ハ能うて御尋遊下ま

た併お悪家の留守でゐ座

いまして（平）此間ハ途中で甚失

敬（五）イエ何殺まして私こそ併

彼処こゝら何方へ迷入ました